論　文

助動詞 should の意味の統合的説明に向けて：中心的意味からの拡張

中澤　紀子（大東文化大学文学部）

Toward a Unified Semantic Account of the Auxiliary *Should*: An Extension from the Core Meaning

Noriko NAKAZAWA

0. はじめに

本研究は、英語の助動詞（auxiliary verb）の中で、「話法の助動詞あるいは法助動詞（modal auxiliary）」と呼ばれるもの、およびそれに準ずるものを対象にして、各々、その多岐にわたる意味・機能を羅列的に見るのではなく、中心的意味・イメージを捉え、そこから意味の拡張モデルに基づいて多種多様な意味グループが派生的に出てくるというふうに見ていく。そうすることで、それぞれの法助動詞の多岐にわたる意味・機能をグループ化し、中心的意味とそこからいろいろな方向に拡張していった意味グループ全体を、有機的に結びついた集合体と見る。それによって、それぞれの助動詞の本質を明らかにし、なぜ、一見ばらばらに見える多くの意味・機能を持つのかという疑問に対して、共時的観点から、統一的説明を与えることをめざすものである。

法助動詞には、典型的なものとして、can, may, must, およびその過去形に相当する could, might がある。他に will, shall の用法の一部、その過去形に相当する would, should がある。また、法助動詞に準ずるものとして、ought (to), had better, need, dare などがある。

それぞれの法助動詞は、特に典型的な can, may, must を中心として、それぞれが持つ複数の意味を２種類に分けて考えることがある。ひとつは、主語に関して、能力・許可・義務などを表現する場合[1]、もうひとつは、話者の立場から可能性・推測・必然性などを述べる場合[2]である。

本稿では、上に挙げた法助動詞の中でも特にその意味・用法が多岐にわたる should に焦点を当てて考察する。should は、一見ばらばらで羅列的に並んでいるように見える多数の意味グループを持ち、should が現れる構造や環境も多種多様である。

第1節では、should の多岐にわたる意味・用法を、中心的な意味（core meaning）から、その意味の一部を共有して意味的拡張が起こる様子を共時的視点から統合的に捉えて、多くの例文を分析しながら詳しく見ていく。

第2節では、第1節で詳しく考察する should の意味の拡張をまとめて示す。

第3節では、残された問題と今後の展望について簡単に述べる。

1. 助動詞 should の中心的意味と意味の拡張

助動詞 should の持つ多種多様な意味・用法をグループ化して表わす試みは、多くの辞書、文法辞典、学習参考書、研究書などで長年行なわれてきた。しかし、筆者は以前からグループ化した意味を単に羅列的に表示するのではなく、それらを全体として有機的関係を持つ‘意味の集合体’として捉えることができないかと考え続けてきた。

本稿では、生成文法や認知文法（cognitive grammar）という大きな流れの中で、複数の学者・研究者たちによって個別に提案されてきたプロトタイプ（prototype）理論、中核（core）から周辺（periphery）へと放射状に意味の拡張や構文の拡張が起こるモデル[3]などを参考にして、助動詞 should に関して、中心的な意味から、意味の一部を共有しながら意味の拡張によって、複数の意味グループがいろいろな方向に放射状に広がる意味拡張モデルを提案する。それによって、助動詞 should の持つ意味の本質を探り、意味グループ相互の関係や別の法助動詞との意味の類似やニュアンスの差異を明らかにしていきたい。また、最終的には、should だけでなく、他の法助動詞についても、その意味の広がりを有機的に説明できることをめざしている。

1.1. 助動詞 should の中心的意味（core meaning）

助動詞 should の持つ多種多様な意味・用法を、歴史的考察はひとまず保留して、共時的な観点から大きな意味の集合体と考えると、should の中心的意味・イメージは、［必然］「周囲の状況・事態によって必然的にそうなることになる」、と［当然］「当然そうであるはずだ」であると考えられる。

should の意味の中心（core）に近いと思われる用法のひとつには、次のようなものがある。

(1) a. <u>It is natural</u> that he **should** be pleased.[4]

彼が喜んでいるのは当然だ。　　安井（1996）p.177

b. <u>It was necessary</u> that he **should** stay there.

彼がそこに滞在する必要があった。　　*ibid.*

(1a, b) の例は、安井（1996）では、［判断］を表わす例として挙げてあるが、It is natural や It was necessary という母型文の意味が［当然］や［必然］であることから、その that 節の形の補文も (1a) では「彼は当然喜んでいるはずである」、(1b) では「彼は（周囲の事情から）必然的にそこに滞在することになる」という意味を持つので、そこに生起する should は、［当然］や［必然］の

意味を持つと想定することにする。

should の中心的意味・イメージに近い用例のもう一方は、次のようなものである。

(2) a. If they are coming by bus, they **should** arrive about six.
バスで来るのなら、6時ごろには着くはずだ。 江川（1991）p.303

b. He earns a good salary, so he **shouldn't** be badly off.
彼はいい給料を取っているのだから、生活が苦しいはずはない。 *ibid.*

(2a, b) の例は、江川（1991）が［当然の推量］を表わす例として挙げているように、(2a) では、「バスで来るのなら」という if 節の条件があれば、それによって、［当然］［必然］的に「6時ごろには着くはずだ」という推量が成り立ち、(2b) でも「彼はいい給料を取っているのだから」という前段が成り立てば、［当然］［必然］的に「生活が苦しいはずがない」という推量が成り立つ。このような環境に現れる助動詞 should の意味を本稿でも［当然の推量］と呼ぶことにする。

1.2. should の中心的意味［必然］［当然］を強調する方向への拡張

1.2.1. ［必然］［当然］から［義務］への意味の拡張

1.1 節で見てきた should の中心的意味である［必然］［当然］の意味を強調すると、「～することが当然」ならば「～するべきだ」という［義務］に発展することは論理的にも自然である。［必然］［当然］から［義務］に発展したと思われる例を見てみよう。

(3) a. You really **should** study more.
君は本当にもっと勉強すべきだ。 安井（1996）p.177

b. Children **should** be taught to tell the truth.
子供たちには本当のことを話すように教えるべきだ。 *ibid.*

c. Government **should** respect the privacy of citizens.
政府は（当然）国民のプライバシーを尊重すべきである。 江川（1991）p.303

d. You **shouldn't** miss this chance. It'll never come again.
この機会を逃すべきではない。 2度と来ないだろう。 *ibid.*

e. Letters of recommendation **should** be simple and to the point.
推薦状は簡潔で要領を得ていることが望ましい。 *ibid.*

f. The government **should** do more to improve education.
Murphy (2012) p.66

ここで、(3) の例文中の should は、［必然］［当然］から拡張した［義務］に近い意味だと考えれば、例えば (3a) ならば、周囲の状況から考えて当然「君はもっと勉強すべきだ」という意味にな

り、同じ［義務］の意味を持つ ought（to）が道徳的義務や法律・規則などに照らして「～すべきだ」という、より客観的な［義務］を表わすのと比べて、should の方は主観的で［義務］の意味を強調しない傾向にあることもうまく説明できる。

1.2.2. ［必然］［当然］から［必要］さらに［重要］への意味の拡張

1.1 節の（1）で見たような It is ＋形容詞の構文で、［必然］「周囲の状況によって必然的にそうなることになる」、と［当然］「当然そうであるはずだ」という意味には、成り行きに任せている消極性が感じられるが、それが意味的に積極的な方向に拡張されると、［必要］「（周囲の状況からして）～することが必要だ」や、さらに、［重要］「～することが重要だ」という意味になると考えられる。以下の例を見てみよう。

(4) a. It's necessary that he **should** wear a jacket and a tie.
上着を着てネクタイをつける必要があります。　江川（1991）p.305

b. It is essential that this item **should** be included in the agenda.
この項目が議事日程に含まれることが絶対に必要です。　*ibid.*

c. It is essential that you **should** do it yourself.
自分でやるのが肝要である。　*Progressive*（2003）p.659

d. It's essential that everyone **should** be here on time.　Murphy（2012）p.68

このような例は、1.1 節の（1）で見た should の中心的な意味の場合と It is ＋形容詞の構文という構造を共有しているため、意味の拡張が起こりやすかったと考えられる。

1.2.3. ［必然］［当然］から［提案］［助言］への意味の拡張

should の持つ話者の心的態度としての「～するのが当然だ」という［必然］［当然］の意味は、対話の環境においては、相手に対して「～すべきだ」「～するとよい」という［提案］［助言］へと拡張することが容易に想像できる。次の例を参照。

(5) a. Mary proposed that he **should** start early.
メアリーは彼が早く出かけることを提案した。　安井（1996）p.178

b. I suggest we **should** meet again tomorrow.
あしたまた会おうではありませんか。　江川（1991）p.305

c. His proposal that we **should** let the matter drop was accepted by everyone.
その話はやめにしようという彼の提案がみんなの賛成を得た。　*ibid.*

d. Doctors recommend that everyone **should** eat plenty of fruit.　Murphy（2012）p.68

e. What do you suggest we **should** do?　*ibid.*

f. I suggested that she **should** buy a car with the money she'd won. *ibid.*

g. He suggested that the tower **should** be restored.

その塔を復元してはどうかと提案した。 *Progressive* (2003) p.1851

h. He suggested which way I **should** go.

どちらへ進むべきか示してくれた。 *ibid.*

次に、上の (5) の例のように、propose, suggest, recommend などの動詞[5]を含む母型文の補文の中に生起する should に比べて、次の (6) に挙げるような、主節や独立文の中に生起する should は、同じ［提案］［助言］の意味であっても、比較的意味が強く、1.2 節の (3) で見た［義務］に近い意味になっていることに注目したい。

(6) a. Liking children the way she does, Sue **should** become a teacher.

あれほど子供が好きなのだから、スーは先生になるべきだ。 荒木 (1997) p.231

b. Children **should** experience the joy of receiving a reward when they've contributed something extra.

子供たちが、何かに特別な力を貸した時には、ほうびを受け取るんだという喜びを経験すべきです。 *ibid.*

c. You **should** gain as much knowledge as possible.

あなたはできるだけ多量の知識を手に入れるべきだ。 *ibid.*

また、「～しない方がよい」という否定の［提案］［助言］は、その意味が強まると「～すべきでない」という意味になり、［批判］や［禁止］の意味にもなり得ることに注目したい。次例参照。

(7) a. I don't think children **should** be paid for routine chores.

私は日常の雑事に子供にお金をやるべきだとは思っていない。 荒木 (1997) p.231

b. We **should not** pay much attention to what the words say.

われわれは言葉そのものには、あまりこだわらないほうがよい。 *ibid.*

c. You **should not** talk loudly in a public place such as a museum and a theater.

美術館や劇場のような公の場所では、大声でしゃべってはいけません。 *ibid.*

1.2.4. ［必然］［当然］から［切望］［主張］［要求］［命令］への意味の拡張

should の持つ［必然］［当然］という中核的な意味は、1.2.3 節で見たように、対話の環境において、相手に対する［提案］［助言］へと拡張する可能性があったが、さらに、相手に対するより強い積極的な介入の方向に意味が拡張すると、相手に向かって「是非～してほしい」という［切望］や「～すべきだ」という［主張］や［要求］、「～しなさい」という［命令］の意味に拡張されることも

容易に考えられる。次例参照。

(8) a. John asked Mary that she **should** leave. 荒木、小野、中野（1977）p.82
b. The doctor ordered John that he **should** take no coffee. *ibid.*
c. I demand that John **should** come here. *ibid.* p. 442
d. I insisted that John **should not** come so often. *ibid.*
e. We insisted that the election **should** be by ballot.
われわれは選挙は無記名投票によるように主張した。 江川（1991）p.305
f. She is anxious that her children **should** be happy.
彼女は自分の子供たちが幸せになるように切望している。 安井（1996）p.178
g. He ordered that the room **should** be cleaned.
彼はその部屋を掃除するように命じた。 *ibid.*
h. The king gave orders that the prisoners **should** be free.
王様はその囚人たちを解放するようにと命令を下した。 *ibid.*

これらの例で注目したいのは、(8f) では「子供たちは幸せであるのが当然である」という気持ちを下敷にして、その状態を切望していること、(8g) では「その部屋が掃除されてきれいになっているのが当然だ」という気持ちで命令し、(8h) でも「その囚人たちは解放されて当然だ」という気持ちで命令していることである。その意味で (8g) は次の (8g') とはニュアンスが異なると思われる。

(8) g'. He ordered someone to clean the room.

(8g') は、単に部屋を掃除するよう命令しているだけで、(8g) のように「その部屋が掃除されてきれいになっているのが当然だ」という気持ちは特に含まれていないように思われる。

このようなニュアンスの差からも、should は、元の中心的な［必然］［当然］という意味を部分的に保ちながら、いろいろな方向にその意味が拡張していくと考えられるのである。

1.2.5. ［必然］［当然］から［決意］［決定］への意味の拡張

should の中心的な意味である［必然］［当然］という意味が、自分自身に向かって積極的に働いた結果、「～することにした」「～することに決めた」という［決意］の意味と整合するように拡張することもあるようだ。次例 (9a) 参照。

(9) a. We have decided that we **should** sell our farm.
私たちは農場を売ることに決めた。 安井（1996）p.178

b. It <u>was decided</u> that the boy **should** be sent to Europe.

その少年はヨーロッパへやられることに決まった。 *ibid.*

これらの例においても、(9a) では「必然的に農場を売らざるを得なくなって意を決して売ることに決めた」、(9b) では「その少年はヨーロッパに派遣されるべくして派遣が決まった」というふうに、元の［必然］［当然］の意味が、拡張後も保持されていることに注目したい。

1.3. should の中心的意味［当然の推量］からの意味の拡張

1.3.1.［当然の推量］から［期待］への意味の拡張

1.1 節で should のもう一つの中心的意味であると想定した［当然の推量］から，期待をこめて「～のはずだ」と思う心的態度を表わす［期待］という意味への拡張が起こると考えられる。次例参照。

(10) a. Helen has been studying hard for the exam, so she **should** pass.

(= I expect her to pass) Murphy (2012) p.66

ヘレンは試験のために一生懸命勉強し続けていたから、きっと合格するはずだ。[6]

b. There are plenty of hotels in the town. It **shouldn't** be hard to find a place to stay.

(= I don't expect it to be hard) *ibid.*

その街にはたくさんのホテルがある。 泊まるところを見つけるのは難しくないはずだ。[7]

1.3.2.［当然の推量］から［意外］［驚き］への意味の拡張

［当然の推量］という中核的意味から出発して、1.3.1 節の［期待］とは反対方向に、即ち、予想と違う、意外だという驚きをこめて「～のはずだ」「～のはずなのに」と思う心的態度を表わす［意外］［驚き］という意味への拡張もまた、確かに起こっていると考えられる。次の例を見てみよう。

(11) a. Where's Tina? She **should** be here by now.

(= She isn't here yet, and this is not normal) Murphy (2012) p.66

ティナはどこ？（おかしいわねえ）この時間までにはここに（戻って）いるはずなのに。[8]

b. The price on this packet is wrong. It **should** be £2.50, not £3.50. *ibid.*

この箱に付いている値段は間違ってるわ。 3.5 ポンドじゃなくて 2.5 ポンドのはずよ。[9]

1.3.3.［当然の推量］から反語の疑問文への意味の拡張

［当然の推量］から［驚き］への意味の拡張には、1.3.2 節の (11) に見られるように、文脈によって［当然の推量］と違う状況を示す場合以外に、次の (12) に見られるように、why, who などの疑問詞を should とともに用いて反語の意味を伝えるという環境もひと役かっていると思われる。

(12) a. Why **should** I lie?

どうして私が嘘をつかなくちゃならないんだ。　荒木（1997）p.232

b. Why **should** he tell you such a stupid thing!

どうして彼がきみにそんなばかなことを言わなくちゃならないんだ。　*ibid.*

c. Why **should** we wait for another chance?

どうして私たちは別の機会を待たなくてはいけないの。　*ibid.*

d. Why **should** you stay in New York in this cold season?

よりによってどうしてこの寒い季節にニューヨークなんかにいるんだい。　*ibid.*

e. Who **should** come in but the president himself!

だれが入ってきたのかと思ったら、なんと社長その人だった。　*ibid.*

f. Why **should** people think that science is boring and hard, when scientists have so much fun doing it?

科学者たちは、科学をすることをおおいに楽しんでいるのに、人はいったいどうして科学は退屈で難しいと思うのだろうか。　*ibid.* p.233

上の（12）の例は、すべて why, who などの疑問詞を用いた反語の疑問文になっており、(12a) では「私は嘘をつくはずがない」、(12b) では「彼が君にそんなばかなことを言うはずがない」という［当然の推量］の否定を含意して、話者の［驚き］［怒り］［批判］などの心的態度を表わしている。

(12c) は、次の（12c'）に示すような含意を持っており、そこに表われた「君たちは別の機会を待つべきだ」という提案を不合理なものと判断して反発していることになる。

(12) c'. You **should** wait for another chance.

また、(12d) は、次の（12d'）に示すような否定の提案あるいは警告を含意している。

(12) d'. You **should not** stay in New York in this cold season.

つまり「この寒い季節にニューヨークなんかにいるべきではない」という気持ちが心の奥にあって、それに反してニューヨークにいる相手に対して強い［驚き］を表わしていることになる。

(12e) は「社長が自らこんなところに顔を出すはずがない、だから、入ってくるはずがない」という気持ちが心の奥にあって、その［当然の推量］を裏切って社長が入ってきたので驚いたという、強い［驚き］を表わしている。

(12f) も when 以下の内容（つまり、科学者たちは、科学をすることをおおいに楽しんでいること）と相反する主節の内容（つまり、一般の人は科学は退屈で難しいと思うこと）を驚きをもって

受け止めて、それを奇妙なことだと思っていると解釈できる。

ここで注目したいのは、(12c) は、次の (12c") のようにも表現できそうだということである。

(12) c". It is absurd that we **should** wait for another chance.

さらに (12e) は、次の (12e') のようにも表現できそうである。

(12) e'. I was surprised that the president himself **should** come in.

また、(12f) は、次の (12f') のようにも表現できそうである。

(12) f. It is strange that people **should** think that science is boring and hard, when scientists have so much fun doing it.

ここで重要なのは、1.3.2 節や 1.3.3 節で見てきたような、[当然の推量] がはずれて予測に反した状態になった時の驚きの表現や反語の表現に用いられる should が踏み台になって、次の節で扱う、いわゆる '驚きの should' が出現したのではないかということである。

もちろん、ここで言う出現とは、英語という言語の歴史の中で出現したという意味ではなく、should の意味の集合体を共時的に見た場合に、中心的な意味からいろいろな方向に放射状に意味が拡張していくモデルを想定し、放射状に拡張していく過程で出現するという意味である。

1.3.4. [当然の推量] から反語の構文などを経て '驚きの should' への意味の拡張

should の中核的意味のひとつである [当然の推量] から、予想と違う、意外だという [驚き] や反語の疑問文などを経て、「感情的な should (emotional should)」や「びっくり should」などと呼ばれることもある、いわゆる '驚きの should' が意味的拡張によって出てきたと考えられる。

[驚き] を主とする強い感情を表わす should は、生起環境や文法構造の点から考えると、典型的に次の A,B,C の 3 種類に分類される。

A. 反語の疑問文および感嘆文に現われる should

B. I'm surprised などに続く補文の that 節や wh 節に現われる should

C. It is strange などの It is + 形容詞[10] に続く that 節に現われる should

A の例には、次のようなものがある。

(13) a. How **should** I know what you said? I wasn't there.

君の言ったことを私が知っているはずがないよ。その場にいなかったのだから。

江川（1991）p.303

b. When I looked up, what **should** I see but an enormous spider!

上を見たら、なんとものすごく大きなクモがいたんだ。 *ibid.* p304

これらの例は、1.3.3 節で扱った反語の疑問文における should の用法と基本的に同じである。

上に挙げたＢとＣの事例は、意味の拡張の点から再度分類し直すと、次の 1.3.5 節と 1.3.6 節と 1.3.7 節で示すような意味グループに分かれ、それぞれの意味の拡張の方向性を確認することができる。

1.3.5. ［当然の推量］から［意外］［驚き］を表わす‘驚きの should’への意味の拡張

ここに挙げる事例は、意味の拡張の点では、1.3.2 節で扱った例と同じ方向への拡張であるが、1.3.3 節の後半の（12c”）（12e’）（12f）で示唆したようなある一定の型の母型文に続く補文の中に現われるという点で、1.3.2 節で扱った例よりも意味の拡張が進み、出現環境が固定化したものと考えられる。

そして、その出現環境は、まさに前節で挙げたＢとＣの環境である。

(14) a. <u>I am surprised</u> that he **should** have failed.

彼が失敗したとは驚きました。 安井（1996）p.177

b. <u>I'm surprised</u> that she **should** have said that sort of thing.

彼女がそんなことを言ったとは意外だ。 江川（1991）p.304

c. <u>It's amazing</u> that Judy **should** want to be a social worker.

ジュディがソーシャルワーカーになりたいなんて、驚きだ。 *ibid.*

d. <u>It's strange</u> that there **should** be so many complaints about our service.

当店のサービスについてそんなに苦情があるのは不思議です。 *ibid.*

e. <u>It is only natural</u> that there **should** be a trade war between the two countries.

両国間に貿易戦争があるのはきわめて当然です。 *ibid.*

（14e）は一見［必然］［当然］という should の中心的な意味のように見えるが、only という限定表現を含むことにより、that 節の内容は、「両国間に貿易戦争なんかあると思っていなかったのに、予想に反して、実は貿易戦争がある」と考え直して、それは、考えてみればきわめて当然である、というふうに再認識したと考えられる。その意味で［意外］［驚き］の意味を含んでいると思われる。

1.3.6. ［当然の推量］から［意外］［驚き］を介して［不合理］［批判］［怒り］への意味の拡張

should の持つ基本的な意味である［当然の推量］が裏切られると［意外］［驚き］の感情が起こ

り、さらにそれが負の方向に勢いを増すと［不合理］だという感情に変わり、［批判］や［怒り］の方向へ意味の拡張が起こると考えられる。次例参照。

(15) a. I see no reason why he **shouldn't** excuse her for such a little fault.
彼がなぜ彼女のそんな小さな過ちを許さないのか、私にはまったくわからない。
江川（1991）p.304

b. It is absurd that women **should** be paid less than men for doing the same work.
同じ仕事で男性よりも女性のほうが給与が低いのは不合理だ。 *ibid.*

c. It's a paradox that in a rich country there **should** be so many poor people.
富んだ国に貧しい人がそんなにたくさんいるとは矛盾したことだ。 *ibid.*

1.3.7.［当然の推量］から［意外］［驚き］を経て［残念］［無念］への意味の拡張

should の持つ［当然の推量］が裏切られると［意外］［驚き］の感情が起こり、そこから［残念］［無念］の気持ちへと移ってゆく可能性も考えられる。ただし、その場合にも、単に残念に思うのではなく、意味拡張の途中で［当然の推量］が裏切られた［意外］［驚き］を経由していることによって、「まさかそんなことになるとは思っていなかったが、残念だ」というニュアンスが出てくると思われる。次例参照。

(16) a. We are sorry that you **should** feel unwanted in our team.
君が自分をチームに不必要な人間と考えているのなら残念なことだ。江川（1991）p.304

b. It's a pity that the trip **should** have been canceled.
旅行が取り消しになったのは残念だ。 *ibid.*

c. (It is a pity) That things **should** come to this!
事ここに至らんとは。 安井（1996）p.178

(16c) は、安井（1996）によれば、that 節の前にある It is a pity という主節が省略された例であるという。主節が省略されていても、that 節内に should があることで、［当然の推量］の結果の楽観が裏切られて［驚き］を経て［残念］［無念］の気持ちに至るという、いわば意味拡張の痕跡が意味の中に残っていると考えると、このような意味拡張モデルを想定する一つの傍証になるのではないかと思う。

2. 助動詞 should の意味の拡張のまとめ

ここで、第 1 節で詳しく見てきた should の意味拡張の様子を、中心からいろいろな方向に放射状に延びるモデルをイメージしてまとめておきたいと思う。

まず、助動詞 should の中心的意味（core meaning）は、ひとつが、［必然］と［当然］、もう一つ

は［当然の推量］である。

［必然］［当然］を強調する方向への拡張には、次のような意味の拡張がある。

［必然］［当然］→［義務］

［必然］［当然］→［必要］→［重要］

［必然］［当然］→［提案］［助言］

［必然］［当然］→［切望］［主張］［要求］→［命令］

［必然］［当然］→［決意］［決定］

［当然の推量］からの意味の拡張には、次のようなものがある。

［当然の推量］→［期待］

［当然の推量］→［意外］［驚き］

［当然の推量］→反語の疑問文

［当然の推量］→反語の構文など → ‘驚きの should’

なお、‘驚きの should’ の生起環境には、次の3種の形式がかかわっており、形式を共有することが、意味の拡張の際の重要な踏み台になると考えられる。

A. 反語の疑問文および感嘆文に現われる should

B. I'm surprised などに続く補文の that 節や wh 節に現われる should

C. It is strange などの It is ＋形容詞に続く that 節に現われる should

［当然の推量］から ‘驚きの should’ への意味の拡張は、さらに次のように伸びていく。

［当然の推量］→［意外］［驚き］→［不合理］→［批判］［怒り］

［当然の推量］→［意外］［驚き］→［残念］［無念］

3. 残された問題と今後の展望

本稿では、共時的観点から助動詞 should の意味の拡張を見てきたが、should という語彙項目について、その起源をさかのぼっていくと、いろいろな問いが浮かんでくる。

should は shall の過去形のかたちを持っているが、should は shall の単なる過去形にすぎないのか。should は shall の持つ意味をどう受け継いでいるのか。shall から受け継いでいない should 独自の意味はあるのか。また、あるとしたら、どうやってその意味を獲得したのか。

今後このような問題を通時的観点も含めて考えて行きたい。

註

[1] この意味は、'root（基本の）' と呼ばれることもある。典型例として、can は「～できる」という能力、may は「～してもよい」という許可、must は「～しなければならない」という義務を表わすとされている。

[2] この意味は、'epistemic（認識様態の）' と呼ばれることもある。典型例として、can は主に否定形の cannot で「～のはずがない」、may は「～かもしれない」、must は「～にちがいない」という蓋然性の判断を示すとされている。

[3] Kajita (1977) (1997) 他で提案されている動的文法理論、Lakoff (1987) で展開されているプロトタイプ（prototype）理論、認知モデル理論の中の放射状カテゴリー（radial category）などを参照。

[4] 以下、例文中の下線と太字は、元の文献によらず、本稿内で表示を統一するため、すべて筆者がつけたものである。

[5] それに対応する proposal などの名詞や対応する形容詞の場合も含む。

[6] 例文の日本語訳は筆者による。

[7] 例文の日本語訳は筆者による。

[8] 例文の日本語訳は筆者による。

[9] 例文の日本語訳は筆者による。

[10] この構文に現われるのは、ある意味特性を持った形容詞のほか、同様の意味特性を持った現在分詞、さらに上述の形容詞と類似の意味を持つ抽象名詞（a pity, a shame）などである。具体例については、江川（1991）p.304 などを参照。

参考文献

Azar, Betty S. (& Stacy A Hagen) (2009) *Understanding and Using English Grammar*, 4th edition, Pearson/Longman.

Kajita, Masaru (1977) "Toward a Dynamic Model of Syntax," *Studies in English Linguistics 5*, 44-76.

Kajita, Masaru (1997) "Some Foundational Postulates for the Dynamic Theories of Language," *Studies in English Linguistics*, ed. by Masatomo Ukaji, Toshio Nakao, Masaru Kajita, and Shuji Chiba, 378-393, Taishukan, Tokyo.

Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, The University of Chicago Press, Chicago and London.

Leech, Geoffrey N (1971) *Meaning and the English Verb*, Longman, London.

Murphy, Raymond (2012) *English Grammar in Use*, 4th edition, Cambridge University Press, Cambridge.

Oxford English Dictionary (*OED* 2009), Oxford University Press.

荒木一雄、小野経男、中野弘三（1977）『助動詞』現代の英文法　第 9 巻　研究社
荒木一雄（1997）『新英文法用例辞典』荒木一雄 編　研究社
江川泰一郎（1991）『英文法解説』改訂三版　金子書房
O. イェスペルセン（Otto Jespersen）著、米倉綽　監訳（米倉 2015）『英語の成長と構造』
（*Growth and Structure of the English Language*）　英宝社
小学館プログレッシブ英和中辞典　第 4 版（*Progressive* 2003）
寺澤芳雄（1997）『英語語源辞典』編集主幹　寺澤芳雄　研究社
安井稔（1996）『英文法総覧』改訂版　開拓社

（2016 年 9 月 28 日受理）